

環境破壊と文明の衰亡

佐藤 孝裕

An Environmental Destruction
as a Factor of the Decline of Civilizations

Takahiro SATO

1. はじめに

近年、環境問題がニュースなどの話題にのぼることが多くなった。地球全体にせよ、ごく身の回りの地域的な規模に限定されるにせよ、環境破壊に関心を持つ人の数も、以前に比べて増えてきている。これは、多くの人が現在の我々の生活のあり方に疑問を持ち始めてきたことの現われに他ならない。人々は、これまでのような成長重視・開発中心のやり方では人間社会はもたないのではないか、先行き危ういのではないか、と考え始めてきたということであろう。

しかしながら、環境破壊を真剣に危機感をもって考えている人は、まだ余り多くないのではなからうか。対岸の火事を眺めるような気分ではいるというのが本音ではなからうか。そして、実は自分の家の土台が燃えていることに気付いていない、あるいは気付いていてもそれを認めたくないというのである。

地球規模の環境破壊が進みつつあるという現状を反映してか、古代文明の滅亡を環境破壊の観点から捉え直す研究が増加している。日本でも、環境考古学の立場から精力的な研究を進めている安田喜憲が、自らの調査に基づいて次のように述べている。「文明が発展し、人口が増大する。すると森林資源が枯渇し、文明は衰亡す

るということを何回も繰り返している。」^{#1}

本論考では、これまでの人類の歴史の中で環境破壊が原因で滅びた、あるいは衰退したと考えられる文明のうち、アメリカ大陸からマヤ文明、ヨーロッパから地中海文明、アジアから東北タイの文明、そして南太平洋からイースター島の文明を例として取り上げ、人類の自然に対する過度の働きかけの所産である環境破壊が、各文明の崩壊といかに関わっていたかを考察したい。

2. 第一次環境破壊と第二次環境破壊

現在、地球環境問題という言葉をししばしば耳にする。これは、環境の汚染や破壊のうち、人間を直接害するわけではないが、重大な環境破壊が大規模に進行する現象のことである^{#2}。これには地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、森林破壊、砂漠化などが含まれる。ここ十年ほどの間に作られた新しい言葉であり、その背景には、地球規模の破壊が進みつつあり、地球が危機に瀕しているという深刻な問題意識・危機意識がある。

ここで注意しなければならないのは、地球環

^{#1}安田喜憲『NHK人間大学 森と文明 環境考古学の視点』日本放送協会1994, pp.155-6。

^{#2}小西誠一『地球の破産』講談社1994, pp.177-8。

境問題というのは地球自体にとって危機的な状況が起きているというのではなく、そこに住む我々人間が危機にさらされているのだ、ということである。自然の中で生まれ育まれながら自然を破壊してきた動物である人間は、まさに自然が生み出した鬼子だと言える^{※3}。実際、地球にとって人類ほど迷惑な存在はかつて存在しなかったと言っても過言ではない。

さて、梅原猛は環境破壊を第一次と第二次の二つに分けている^{※4}。普通環境破壊と言うと、近代科学文明の発達による負の遺産と捉えられがちであり、従って環境破壊は産業革命以降、すなわち18世紀より後に始まったように思われがちである。梅原はこの環境破壊を第二次環境破壊と名付けている。では第一次環境破壊とは何かと言うと、それは農耕・牧畜文化の発明によるものである。約400～500万年前に誕生したとされる人類の歴史のほとんどは採集狩猟生活であった。農耕・牧畜が始まったのは、わずかに2000年前位に過ぎない。それまでは、人類は一動物として獣や魚をとり、植物を採集するというように、あるがままの自然の恵みに頼る受動的な生活を送っていたのである。ところが、農耕・牧畜という自然に積極的に働きかける新しい生産方法が生まれてから、人間の生活は大きく転換する。農業を発明することによって人類は植物を計画的に栽培することができるようになり、植物のコントロールへの第一歩を踏み出したのである。そして、牧畜により動物を家畜として支配し、働かせ、乳を搾り肉を食べることができるようになった。こうして人間は動植物を支配し、自然を支配するようになったのである。

この農耕・牧畜文化を基盤として、約5000年前にメソポタミア地方に最初の都市文明が誕生する。都市文明は、神殿や宮殿などの巨大な建築物を建てるため、あるいは海上交易に必要な

船を建造するために大量の木材を必要とした。また、金属器が発明されると、精錬のためにますます木材の需要が増した。そのために人々は周囲にある森を容赦なく伐採するようになった。こうして都市文明が発展すると同時に、森が消えて行った。つまり、都市の建設につながるの深い森林破壊が、環境破壊の第一歩だったのである。

3. 文明の崩壊過程の諸例

(1) 古典期マヤ

古典期マヤ文明は、3世紀の半ば頃に繁栄し始め、10世紀頃崩壊した。地形の点でマヤ地域は低地と高地に分けられ、低地は更に北部と南部に分けられるのであるが、古典期の文明はマヤ地域の中でも低地南部で栄え、古典期の後に来る後古典期の文明(10～15世紀)は低地北部で栄えている。従って、ここで言うマヤ文明の崩壊とは、正確に言えば、低地南部で栄えた古典期マヤ文明の崩壊のことである。

古典期マヤ文明の崩壊を一言で言うと、8世紀の半ば頃から10世紀の初め頃にかけて、マヤ低地南部のほとんどの都市及びそこに住む人々に生じた一連の変動ということになる。具体的には、次のようなことが起こった。

- ① 行政・居住用建築(宮殿)の放棄
- ② 祭祀用建築(神殿)の建設・改築の中断
- ③ 彫刻の施されたモニュメント(石碑等)の建立の中断
- ④ 暦^{※5}や文字体系^{※6}の廃退
- ⑤ 都市及びその周辺における明白かつ急激な人口減少

ここで注意しなければならない重要な点は、エリート^{※7}が作り出した文化がなくなっただけではなく、それに伴って数百万にも及ぶと推定

^{※5}「長期計算法(Long Count)」と呼ばれ、紀元前3114年8月11日を起点とし、その日から何日経過したかを数える一種の絶対暦。

^{※6}南北アメリカ大陸で、文字という名に値する複雑な体系を発明したのはマヤ文明だけである。

^{※7}メソアメリカ先史学における「エリート」とは、王・貴族・神官など社会の指導者層のことである。

^{※3}湯浅起男「近代文明と環境破壊」石弘之・沼田真編『講座文明と環境 1 環境危機と現代文明』朝倉書店1996, p.12。

^{※4}梅原猛「環境破壊はいかにして起こり、今何をなすべきか」石弘之・沼田真編『講座文明と環境 11 環境危機と現代文明』朝倉書店1996, pp.168-75。

される大規模な人口減少が生じたということである。つまり、古典期マヤ文明崩壊は、単にエリートの支配する政治組織が解体したことを意味するだけではなく、それと共に都市とその周辺の村落がエリートと平民の両者によって放棄されたのであり、古典期における低地南部のマヤ社会という一つのシステム全体が崩壊したのである。

マヤ文明崩壊の原因に関しては、数々の仮説が提出されている。土壌の疲弊、気候変化、自然災害(ハリケーン、地震)、虫害、疫病、人口過剰、農民の反乱、都市間の戦争、交易パターンの変化、異民族の侵入、などである。このように仮説の数は多いが、研究者の間には意見が一致している点がある。それは、古典期マヤ文明は単一の原因によって滅びたのではない、ということである。つまり、古典期マヤ文明は、様々な要因が複雑に絡み合い、それぞれの要因が相互作用によって増幅し、それが低地南部マヤ社会に壊滅的打撃を与えた、というわけである。

さて、どのような仮説を立てるにせよ、それが有効であるためには少なくとも二つの事柄を説明できなければならない。それは、なぜ人口がひどく減ったのかということと、なぜ低地南部は二度と復興しなかったのか、ということである。人口減少に関して言えば、古典期マヤ社会において最大規模を誇った都市ティカルでは、100年ほどの間に人口がわずか10%にまで減少している。それほどまでに人がいなくなったのはなぜか。これが滅亡の原因を考える上でのポイントであろう。そして、この二つの事柄を最もうまく説明できるのは、マヤ人による行き過ぎた成長指向の結果としての環境破壊であると筆者は考える。つまり、過度の開墾が環境破壊をもたらし、食料生産を壊滅させ、多数の人口を支えることが出来ない不毛の土地にしまった、と考えるのである。そこで次に、古典期マヤ文明崩壊の過程を簡潔に述べたい⁸⁸。

古典期マヤ文明の基盤であり、発展を支えていたのは、様々な方法から成っていた農業シス

テム⁸⁹であった。しかし、人口が余りにも増え過ぎ、その人口を支えるだけの食料を生産するためにそれまでの農業システムを拡大し続けるうちに、いつしか低地南部の環境の許容能力を超えてしまった。しかも800年前後に気候の温暖化に伴う乾燥化が生じ⁹⁰、農地拡大のために大量に伐採した森林の回復を妨げた。古典期後期に入って急増した都市間の戦争が、これらの危機的状況に拍車をかけた。更には、マヤ地域の西部辺境に住んでいたチョンタル・マヤ人⁹¹が侵入し、弱体化していた低地南部マヤ社会にとどめの一撃を与えた。ただ、たとえチョンタル・マヤ人の侵入がなかったとしても、生業体系が壊れてしまった古典期マヤ文明の滅亡は避けられなかったであろうし、チョンタル・マヤ人が侵入してきた頃には既に放棄されていた都市もあったかも知れない。事実、荒れ果てた低地南部は、もはや彼らチョンタル・マヤ人にとって利用価値はなかった。だからこそ、彼らは低地南部に長くはとどまらずに低地北部に移動し、後古典期マヤ文明を築いている。古典期が終わる頃から後古典期にかけてのチョンタル・マヤ人の重要性は、低地南部社会の崩壊を決定的な

⁸⁸詳細については、佐藤孝裕「古典期マヤ文明崩壊再考—環境破壊の観点から—」『歴史学研究』654, 1994, pp. 1-20, を参照。

⁸⁹現在でも見られる焼畑農業だけではなく、河川や湖のほとりでの盛土畑農業や傾斜面での階段耕作などの集約的農業も広い範囲で行われていた。

⁹⁰ユカタン半島中央部に位置するチチャンカナブ湖の湖底から採取した、貝虫類と腹足類の貝殻の炭酸カルシウムの酸素同位体比と堆積物の中のジプサムの量の変動の分析から、800年頃から1000年頃が顕著な乾燥期であったことがわかっている。安田喜憲「3000年前の気候変動と宗教革命」安田喜憲・林俊雄編『講座文明と環境 5 文明の危機—民族移動の世紀』朝倉書店1996, pp. 31-3。古気候復元図を見ても、8世紀から13世紀には気温が1~2℃高く、温暖化していることがわかる。ヴァイキングが盛んに活動し、その一部が北米大陸に到達して一時的に居住したのもこの間である。北川浩之「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」吉野正敏・安田喜憲編『講座文明と環境 6 歴史と気候』朝倉書店1995, p. 52。

⁹¹古典期のマヤ文明の枠外にあり、メキシコ中央高原文化の影響を強く受けたマヤ人の一グループ。ちなみに、マヤ人はその話す言語によって約30に分類されており、チョンタル・マヤ人もその一つである。

ものにしたことではなく、低地北部を中心とした新しいシステムを確立したことにあるのである。

程度や時期に差こそあれ、人口増加が基になって起こった環境破壊とそれを悪化させた気候変化、その結果としての食料の欠乏とそれによる栄養失調の悪化、そしてもしかすると疫病も広まったことによって、たくさんの方が死んだと考えられる。この危機を逃れて他の地域への移住が行われた可能性も示唆されている。こうして、低地南部は環境破壊を被った上に、新しい時代の枠組みの外におかれ、比較的崩壊がひどくなくなった地域で生き残った人達が村落レベルの生活を営んだだけで、かつての文明が復興することはついになかった。

要するに、古典期マヤ文明崩壊を一言で言うと、人口が許容できる限界近くまで自然の生態系が搾取されていたために、文明は再生しなかった、ということである。平たく言えば、人口が増え過ぎ、その増え過ぎた人間による自然への働きかけに自然が耐えられなくなった、ということである。マヤ低地南部は現在熱帯雨林によって大地が覆い尽くされているが、これはかつて繁栄を極めていた頃の姿ではない。熱帯雨林気候に属すこの地域では、長い年月を経て森林が回復したため、かつての荒れ果てて放棄された有様が想像できなくなってしまったのである。

(2) 地中海

ここでは、地中海文明の先駆をなしたエゲ文明のうち、ギリシア本土で栄えたミュケナイ文明の崩壊の過程についてみてみたい。

エゲ文明には中心地が少なくとも三つあった^{#12}。一つはクレタ島を中心にして紀元前2000年頃から約500年の間繁栄したミノア文明であり、また少し遅れて小アジアではトロイア文明が栄えた。残る一つが紀元前1900年頃からギリシア本土に侵入したギリシア人がミノア文明の影響を受けて築いたミュケナイ文明であり、紀元前17世紀頃から前12世紀頃まで、ギリシア本土のミュケナイを中心に栄えた^{#13}。この文明の経済的発展は、いくつもの産業によって支えら

れていた^{#14}。一つは、大麦・小麦などの麦類や麻と豆類、及びいちじくや葡萄・林檎・西洋梨・ざくろなどの果樹の栽培と、羊・山羊・豚などの牧畜である。また、青銅器産業や陶器産業、及び織物業や皮製品の製造も盛んであった。新たな農地を得るためや家畜を放牧するために、人々は森林を切り開いていった。殊に過剰な放牧は森林の再生を妨げるにとどまらず、地表に生えた草を食べ尽くすことで土壌の浸食を起りやすくした^{#15}。こうして破壊された森は、人間が営みを続ける限りは再生することができなかった。長い夏の乾季も、森林の回復を困難にした。それに加えて、先に述べた製造業の存在がある。これらの製造業は大量の薪を必要とした。更に、製品を輸出するためには巨木を伐採して艦船を建造しなければならなかった。こうして森林破壊に拍車がかかることになった。また、ミュケナイ社会の経済が発展するに従って人口が急増し、家を建てるため、あるいは日々の調理に必要な薪のために森は更に消えていった。

森林資源の枯渇は、発展してきたミュケナイ社会にとって致命的な問題であった。森林資源がなければ、製品を製造することも、それを輸出することもできないからである。また、森がなくなった山々から、地中海性気候特有の冬雨によって表層の土壌が流れ落ち、湾岸を埋めるようになった。しかも、紀元前1200年頃、気候が寒冷化した。気候の寒冷化による冬雨の増加は、麦類を始めとする穀物の生産に打撃を与えるにとどまらず、土壌の浸食を激化させた。交易によって栄えたティリンスの港も埋り、広大な湿地が出来上がり、湾岸地帯にあったこの都

^{#12}藤縄謙三『ホメロスの世界』新潮社1996, pp.20-1。

^{#13}ピエール・レバック『ギリシア文明—神話から都市国家へ—』創元社1993, pp.24-32。

^{#14}安田喜憲『気候が文明を変える』岩波書店1993, pp.42-3。

^{#15}地中海世界で最も一般的な牧畜用の動物といえば羊と山羊であるが、環境に対して最も破壊的であったのも羊と山羊であった。羊と山羊が放牧された所では山の斜面が裸にされ、露出した土壌が侵食を起こした。湯浅越男『環境と文明—環境経済論への道—』新評論1993, pp.87-8。

市は次第に内陸に位置するようになった¹⁶。湿原が拡大することによって港が埋り、経済活動に大きな打撃を与えるだけではなく、都市住民にマラリアなどの疫病をもたらす巣窟を生み出すことになった¹⁷。

このように、森林の消滅、土壌の劣化、気候寒冷化、そして疫病の蔓延などによって、ミュケナイ社会は衰亡する。ところが、人口が激減した大地にはやがて森が回復した。そして、気候の寒冷化で北方から南下してきたドーリス人などがこの人口が希薄な地に移住し、新たな時代の文明の担い手になるのである。しかしながら、新しい時代を切り開くことになるギリシア世界も、また更にその後が続いて地中海世界に覇権を唱えたローマ世界も、同様のプロセスを辿って衰退するのである¹⁸。

(3) 東北タイ

従来、13世紀になって東北タイが突然衰退した原因は、頻発する戦争と灌漑水路網の破壊に帰されていた。しかし、それだけではなく、森林の破壊も大きな要因として考えられる¹⁹。

東北タイでは、紀元前4000年紀頃から農耕の開始に伴って森林破壊が始まり、それと共に多くの遺跡が残されるようになった。中でもバンチェン遺跡やバンナディ遺跡では、大規模な集落が形成されたり、豊富な装飾品をもった墓などが見つかっており、当時の社会の豊かさを窺わせる。紀元後も6世紀頃から仏教を中心とするドヴァーラヴァーティー文化が栄えたり、クメール人の侵入を受けたりした。しかしながら、東北タイは元来農業に不向きな土地柄なのである。それにもかかわらず、このように早くから社会の階層化が進み、豊かな経済力を有するようになった背景には、製塩及び製鉄産業の存在

があった。塩や鉄を生産し、交易することによって繁栄を築いたと考えられるのである。これらの産業は、紀元前1000年紀後半から盛んに行われるようになった。そして、いずれも大量の材木を要する産業である。ここに、東北タイの衰退の淵源があった。と言うのも、この地域の森林は乾燥フタバガキ林の疎林であり、この地方のような熱帯の乾燥気候では、一旦破壊されると回復するのが困難なのである。こうして、1000年以上に渡って行われ続けた製塩・製鉄活動であるが、大規模な森林破壊による降雨量の低下が原因で気候の乾燥化が進み²⁰、塩害が激化した。それに加え、他の地方でも製塩・製鉄が行われるようになり、これらの両産業が経済的基盤になっていた東北タイは大きな打撃を受けた。その結果、13世紀以降突然製塩・製鉄は行われなくなる。こうして、製塩・製鉄産業を基盤にして発展した東北タイは、発展の源であったこれらの産業に伴う森林破壊の結果、衰退するのである。

(4) イースター島

イースター島に初めて辿り着いた人類はポリネシア人であり、その時期は5世紀始め頃とかなり遅かった²¹。彼らが到着した時、太平洋の真ただ中にあるこの島は文字通り絶海の孤島であり、数少ない動植物が生息していただけであった。彼らの食事は鶏とサツマイモを主体とする単調なものであったが、サツマイモの栽培には余り手がかからなかったため、余暇は十分にあった。このことが巨大な石像モアイを数多く建立することを可能にした。

当初20人から30人ほどであったとみられる島の人口は、1600年頃には9000人に達したと推定され、最盛期を迎えるのであるが、その直後に社会は突如崩壊する。その原因として考えられるのが、島全体に及んだ過度の森林伐採である。人口が増えるに従って、農耕、家の建築、調理

¹⁶安田喜憲『森林の荒廃と文明の盛衰』新思索社1995, pp. 211-15.

¹⁷安田1995, 前掲書, pp. 215-17.

¹⁸中井義明「ギリシア文明とその画期」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境 2 地球と文明の画期』朝倉書店1996, pp. 104-21; クライブ・ポンディング『緑の世界史・上』朝日新聞社1994, pp. 128-33.

¹⁹新田栄治「東南アジア文明の興亡と環境変動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994, pp. 149-63.

²⁰熱帯地方における森林の破壊は、その地域の気候を変えることさえある。ポンディング『緑の世界史 下』朝日新聞社1994, p. 54.

²¹カテリーヌ・オルリアック, ミッシェル・オルリアック『イースター島の謎』創元社1995, p. 134.

やカヌーの製作などのために、木々が切られていった。森林伐採に拍車をかけたのが、700年以前から始まったと考えられるモアイの製作である。巨大なモアイを運搬するには丸太が使われたと考えられており、そのために大量の木材が必要になったのである。こうしてポリネシア人が到着した頃に緑に覆われていたイースター島は、1600年にはほぼ全ての森林を失ったのである²²。

森林破壊の影響は、既に1500年頃には現れ始めている。この頃になると、木材の不足が原因で木造の家を建築することができなくなり、多くの人々が洞窟で暮らさざるを得なくなったのである。またカヌーの製作も困難になり、十分な漁ができなくなった。更に森林の消失は土壌の浸食をもたらし、作物の生産は大きな打撃を受けた。この結果、9000人にも膨れ上がった島の人口を養うことができなくなり、人口は激減し始めるのである。こうしてイースター島は未開状態に戻り、ヨーロッパ人が訪れた時には、残存した島民は自分達の祖先が残した遺産さえろくに知らない状態になってしまうのである。

4. 文明崩壊のパターンと現代文明とのアナロジー

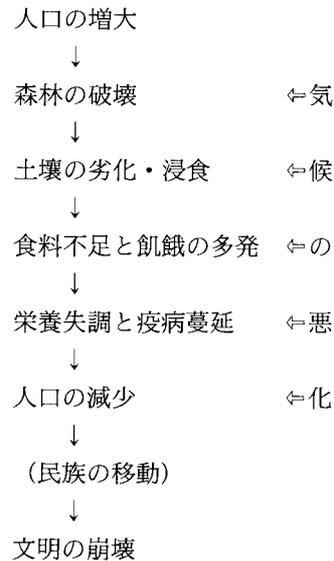
人間による環境破壊が文明の崩壊をもたらしたと考えられる例は枚挙に暇がなく、前章で挙げた例はその一部に過ぎない²³。もちろん、全

²²18世紀にヨーロッパ人がイースター島を訪れた時、島には死火山ラノカオの最も深い火口の底にわずかの茂みがあったのみで、木は一本もなかった。ポンティング、前掲書(上)、p.15。

²³たとえば、メソポタミア文明やインダス文明の場合に関しては、以下の文献を参照。ポンティング、前掲書(上)、pp.119-26;近藤英夫「インダス文明の興亡と環境変動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994、pp.126-46;同「インダス文明の興亡と画期」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境 2 地球と文明の画期』朝倉書店1996、pp.122-34;徐朝龍「インダス文明—その盛衰の道」安田喜憲・林俊雄編『講座文明と環境 5 文明の危機—民族移動の世紀』朝倉書店1996、pp.99-111;安田喜憲『人類破滅の選択』学習研究社1990、pp.187-22。

ての文明の衰亡の原因を環境破壊のみに帰すことはできないし、古典期マヤ社会のように社会全体がほぼ完全に放棄された例は稀少である。しかし、環境破壊が文明の衰退に少なくとも何らかの関わりを持っていたことは否定できない。

さて、第3章で取り上げた様々な文明の衰退過程を検討すると、文明の崩壊には共通する要因とプロセスがあることがわかる。それは、次のように図式化できる。



第3章で取り上げた文明を衰退させた要因の全てを、現代文明は抱えている。発展途上国における人口の爆発的増加と飢餓、熱帯林の破壊に代表される森林破壊と土壌の劣化、エイズやエボラ出血熱などの致死率の高い疫病、異なる宗教や民族間の紛争とそれによる難民の発生、それに土壌・地下水・大気や海の汚染が加わっている。更に、地球温暖化という気候変動も迫っている。過去の例に照らし合わせて見ると、現代文明は崩壊の瀬戸際にあると言わざるを得ない。では、それはどのようにして起こるのであろうか。

現代文明の根底にあるのは近代ヨーロッパ文明であるが、安田喜憲はヨーロッパ文明の基礎を築いたギリシア文明と近代ヨーロッパ文明には類似性が見られるとし、その類似性を比較し

て現代文明の将来を予測している^{#24}。それを生起順に列挙すると次のようになる。

① 文明誕生の契機としての気候の寒冷化

ギリシア文明が発展し始めるのは紀元前800年頃からである。ポリスが形成され、商工業が発展し、小アジアや地中海一帯への植民活動も盛んに行われる。この時代は紀元前1200年頃から著しくなった気候寒冷化の極期である。

他方、ヨーロッパを中心とする近代文明は、17世紀の科学革命を契機として発展し始める。この頃も、小氷期の寒冷期の第一小氷期と呼ばれる気候寒冷化の極期であった。

② 巨大戦争の勃発

地中海世界に乗り出したギリシアは、アケメネス朝ペルシア帝国との戦争に直面する。紀元前492年に始まり、前479年にアテネ・スパルタ連合軍が勝利を収めるまで14年間に渡って続いたこの戦争は、地中海世界とオリエント世界が対決したかつてない規模の大戦争であった。

近代文明も、ギリシア文明と同じく約300年後の20世紀に第一次及び第二次の世界大戦という巨大戦争を経験する。この二度に渡る戦争は、文字通りほとんど世界中を巻き込み、科学技術を駆使して行われた未曾有の大戦争であった。

③ 繁栄と人口爆発

ペルシア戦争に勝った後、ギリシアは最盛期を迎える。アテネやスパルタを始めとする多くのポリスで人口が急増する。

第二次大戦後の世界では、近代ヨーロッパ文明を受け継いだ戦勝国米が繁栄する。また、人口の爆発的増加が生じ、それはかつて人類が経験したことがない規模で現在進行している。

④ 森林の破壊

最盛期を迎えたギリシアでは、アテネのパルテノン神殿に代表されるように、巨大な建築物が各地のポリスで作られた。これらの建築物や艦船を作るため、あるいは金属器や陶器を製造

するのに用いる薪などのために、大量の木材が必要になり、次々に森林が伐採された。

現代社会でも、米国型の消費至上主義が世界中に蔓延すると共に、熱帯林を始めとして発展途上国の森林が激しく破壊されつつある。

⑤ 疫病の流行^{#25}

森林が大規模に破壊されたギリシアでは土壌の浸食が激しくなり、湾岸や内陸の湖を埋めて湿原に変えた。この湿原がマラリアを媒介する蚊の巣窟になり、マラリアがギリシア全体で流行した。

そして現代世界は、エイズやエボラ出血熱のような不気味な流行病の脅威にさらされている。

⑥ 内紛の多発

ペルシア戦争に勝ってから50年後に、ギリシア世界には内紛が頻繁に起こるようになり、それはペロポネソス戦争に発展する。アテネとスパルタの二大陣営に分かれて戦ったこの戦争に勝者はなく、ただ国土が荒廃しただけであった。

第二次大戦後50年余りが経過した今日、米ソの冷戦が終わったものの、世界中で民族や宗教を原因とする紛争が多発し始めている。その解決のめどはたっていないというのが現状である。

⑦ 地球温暖化

紀元前4世紀に入ると、気候は温暖化した。この影響で、ギリシアでは乾燥化が進行した。河川や湖の水量が減少し、マラリア蚊が繁殖するのに絶好の環境になった。また森林破壊が保水力を低下させ、飲料水の不足と汚染をもたらした。これが腸チフスなどの疫病の蔓延に拍車をかけたと考えられる。こうして環境破壊と疫病の流行が、多発する戦争で疲弊した人々が立ち直るのを妨げた。

これと同じような状況は、現在アフリカなどの諸地域で見られる。そして、現在の我々も地球温暖化の危機にさらされており、2030年には年平均気温が2～3℃上昇する可能性が指摘さ

^{#24}安田喜憲「歴史は警告する＝現代文明崩壊のシナリオ」伊東俊太郎・安田喜憲編『文明と環境』日本学術振興会1995, pp.44-9; 同「現代文明崩壊のシナリオ」安田喜憲・吉野正敏編『講座文明と環境 6 歴史と気候』朝倉書店, 1995, pp.246-60。

^{#25}ボンディングによると、農業の開始に伴う定住化が様々な病気の発生の原因になった。ボンディング, 前掲書(下), pp.5-26。

れている²⁶。このように、地球が温暖化すると海面が上昇し、低平地が水没することになり、ただでさえ急増する人々が住む場所が少なくなる²⁷のに加えて農地も減少することになり、食料危機が加速する恐れがある。

⑧ 民族移動²⁸

紀元前338年のカイロネアの戦いでアテネとテーベの連合軍がマケドニアの軍門に屈し、ギリシアはマケドニア人に席卷される。皮肉なことに、ギリシア文明が崩壊した後、人口が減少したギリシアには森林が回復する。丁度古典期マヤ文明崩壊後に、マヤ低地南部に森林が回復したように。

そして、現在の地球には、環境難民と呼ばれる人々が生まれ始めている。彼らは深刻化する環境破壊を象徴する存在と言える。砂漠化、土壌浸食、熱帯林喪失、洪水や干ばつなどの自然災害が原因で故郷を離れて放浪する環境難民は80年代に入って急増し、既に1億人近くが難民化しているとの推定もある²⁹。

歴史的事象の中に安易にアナロジーを見出し、それを単純化するのは危険であろう。また、地球環境の悪化が人類を脅かしつつあるという現状認識が、過去を色眼鏡で見ることにつながっている可能性は否定できない³⁰。従って、ここで言えるのは、単なる仮定に過ぎない。

²⁶日本経済新聞社編『ベーシック地球環境問題入門』日本経済新聞社1992, p.19

²⁷石弘之「総論 地球環境の危機」石弘之・沼田真編『講座文明と環境 11 環境危機と現代文明』朝倉書店1996, pp.3-5。

²⁸安田喜憲は、民族の大移動は文明が危機に瀕していた時代に起こったとし、それを気候変動との関わりから捉えている。安田喜憲「総論 文明の危機と民族移動」安田喜憲・林俊雄編『講座文明と環境 5 文明の危機—民族移動の世紀』朝倉書店1996, pp.1-17。また、伊東俊太郎は、もっと広い意味で、人類文明史の大転換期を気候や環境の変動と関連づけている。伊東俊太郎「総論 1 文明の画期と環境変動」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境 2 地球と文明の画期』朝倉書店1996, pp.1-10。

²⁹石弘之「地球環境の危機と環境難民」安田喜憲・松岡数充編『文明と環境 II 日本文化と民族移動』思文閣出版1994, p.17

しかしながら、こうして両者を比較してみると、もし現代文明がこれからもギリシア文明と同じような道を辿るとすれば、21世紀中に崩壊する可能性は極めて高いように思われてならない。この悲観的観測の根底には、止めどなく悪化する環境への危機感がある。

事実、環境破壊が社会を破滅の方向に導いた例は、かつての古代文明だけにとどまらない。最近の例³¹では、内戦が終わりそうもないルワンダが好例である。かつてアフリカのスイスとも謳われた緑美しい国であったルワンダでは、国土の8割を占めていた森林が、3.4%という驚異的な増加率で増え続ける人口を養うため、燃料集めと開墾のためにどんどん森林が伐採され、現在では7%を割っている。そのために、国土の40%もが土地の浸食を起こしている。そして、わずかこの10年で、食料生産は2割近くも減っている。減少した耕地の奪い合いに部族間の対立が加わり、泥沼の内戦に陥っているわけである。

政情不安の続くカリブ海のハイティも同様である。コロンブスが見た時には緑豊かな島であったこの国でも、かつて国土の6割もあった森林が、現在ではわずか0.8%にまで激減している。そして、国土の7割が深刻な土地の浸食を起こしている。このように農地が荒れ果ててしまったために、食べていけなくなった農民が首都のポルトープランスに流入し、巨大なスラムを形成し、政情不安を作り出している。

また、アフリカのソマリアでも、森林の消失と放牧のやり過ぎが原因で、過去20年間で国土の全体がほぼ砂漠化している。

同じアフリカのエティオピアでも、人口と家畜が爆発的に増えたために、過去30年間で全森

³⁰考古学も世相の影響を受けるのは、言を待たない。たとえば、古典期マヤ文明の崩壊の原因に関しても、ヴェトナム戦争が激化していた1960年代後半には戦争仮説が目され、環境運動が起こり始めた70年代前半は土壌の疲弊説が脚光を浴びた。Jeremy A. Sabloff, *The New Archaeology and the Ancient Maya*, Scientific American Library 1990, p.166。

³¹以下に述べる諸例については、石弘之「もう地球は我慢できない」朝日新聞1994年10月26日付、を参照。

林の9割が失われている。

アマゾンの最も奥地にあるといわれるブラジルの Rondônia 州でも、10年前には延々と広がる樹海の中にかすかに道路が見えるだけであったのが、今では一面の焼畑に変わり、森林はほとんど残っていない有様である³²。このように、環境破壊は、確かに短い年月で社会を破滅の方向に導き得るのである。

5. おわりに

我々人間は、科学技術文明のおかげで豊かで便利な生活を手に入れることができた。しかしその反面、それと同時に大規模な環境破壊も行ってきた。第2章で環境破壊を第一次と第二次に区別したわけであるが、第二次環境破壊は、規模の点で第一次環境破壊の数千・数万倍に達する激烈なものであると言っても過言ではない³³。第一次環境破壊による森の消失は、文明が栄えた場所やその周辺の地域にとどまった³⁴。しかし、現在進行中の第二次環境破壊による被害は、全世界に広がっている。しかも第一次環境破壊では想像もできなかったような恐るべき事態を引き起こしている。それはたとえばオゾン層の破壊であり、酸性雨であり、地球の温暖化であり、いずれも地域を越えた協力、世界レベルの協力がなければ解決が不可能な深刻な問題である。しかも第一次環境破壊が数百年・数千年の長い年月の間に行われたことであったのに対し、第二次環境破壊はそれより遥かに早いスピードで進行しつつある。それにもかかわらず、環境破壊が人類の生存にかかわる

深刻な問題であるということ、多くの人々が認識しているとは思えない³⁵。

文明が成立し、それが発展し続けるためには、森と土と水が不可欠である。しかし、それを無視し、やがて自然が持つ扶養力の限界を超えるほど都市が巨大化した時、都市という人類が作りあげた人工的世界は繁栄を終えた。そして、逆に自然に呑み込まれ、人間を排除した元の世界に戻ってしまうのである。けだし、人類は狩猟採集生活から農耕牧畜に移行した時点で、自然とは決別したと言えるのではなからうか。それまで自然の一部であり、一生物に過ぎなかった人間であるが、農耕を発明したことで道を踏み外したのではなからうか。農業には、何となく自然に近い、自然に密着した生業であるような印象がある。「大地に生きる農民」という言葉には、自然と共存している人間の誇りのようなものが感じられる。今風に言えば、農耕・牧畜生活は、極めて「自然にやさしい」生活のように思える。しかしながら、実際には農業こそが人類のみに都合がいいように生態系を改変した先駆者だったのであり³⁶、その意味で農耕の発生は人間中心主義³⁷の最初の現われでもあったのである³⁸。

1992年にリオ・デ・ジャネイロで初めて環境と開発に関する国連会議（地球サミット）が開かれて以来、様々な会議が催され、多くの提言がなされている。しかしながら、地球環境問題

³²このことは、ローマ・クラブが既に1971年に出した『成長の限界』において、「世界人口、工業化、汚染、食糧生産、および資源の使用の現在の成長率が不変のまま続かならば、来るべき100年以内に地球上の成長は限界点に到達するであろう。」と結論づけ、更に意見の一致点を10の見解にして報告しているにもかかわらず、顧慮されることもないまま放置され、それが現在の環境問題につながっていることから明らかである。D・H・メドゥズ、D・L・メドゥズ、J・ラングズ、W・W・ベアランズ3世『成長の限界』ダイヤモンド社1972、p.11、及びpp.178-84。

³³クライブ・ボンデン、前掲書(上)、pp.117-8。これに対し、岸根卓郎は、水田稲作農業は森林を伐採して水田にするという点では環境を破壊するが、自然との共生がなくては成立しない生業なので、水田稲作農業のもとでは大規模な自然破壊は起らない、としている。岸根卓郎『森と文明』サンマーク出版1996、p.42。

³²ブラジルの熱帯雨林は、今のペースで伐採が進めば、あと25年で消滅すると見られている。湯浅1993、前掲書、p.324。

³³梅原、前掲書、p.174。

³⁴地球規模の気候変化が、政治経済上の問題・異民族の侵入・都市活動の低下・疾病災害の発生・人口の減少などの人間活動からくる不適正な土地利用を経てたらされる環境変化と連動して、文明を衰退させた、とする吉野も、その規模はあくまで局地的なものであったとしている。吉野正敏「東アジアの歴史時代の気候と人間活動」吉野正敏・安田喜憲編『講座文明と環境 6 歴史と気候』朝倉書店1995、pp.24-5。

が好転したという話は聞かれない。これは、この問題が単なる人間の行動様式を変えれば解決できるという段階を過ぎて、生産も消費も廃棄も拡大させ続けなくては行けないという現代文明のあり方自体が問題になってきているからではなからうか。これまで常に発展を目指してきた人類は、初めてその哲学を捨てる、あるいは少なくともその考えを転換することを迫られるという、人類至上最大の問題に直面しているのである。

環境破壊を引き起こしたのは、人間誰もが持っている「もっと」という気持ちであった。「もっと豊かになりたい」「もっと便利に」などといった欲望である。こういう人間の、現状維持に満足しないで一段と高いところへ行こうという気持ち、成長指向というもののおかげで、現代の科学技術が発展し、我々は現在の物質文明を楽しんでいるのも事実である。しかしながら、それと同時に恐ろしい環境破壊が進んでいることに気付かないできた、あるいは目をつぶってきたのである。それは今も変わらない。

我々が現在享受しているのは物質文明であると、敢えて「物質」という語を文明の前につけた。今我々を取り巻いているのは、精神をどこかに置き忘れてきた物質的欲望の世界である。そこでは消費は美德であり、人々が追い求めているのは、色々な意味での快楽である。今が楽しければそれでいい、どんどん開発を進めてどんどん消費しよう、先のことは何とかなさ、当分世界全体が困ることは起こらないであろうし、遠い将来そんなことになっても、もう自分は生きていないだろうから関係ない。こういう自分本位で無責任な刹那主義的思考が、多くの人の気持ちに潜んでいるのではなからうか。そして、まず間違いなく、同じような原因で滅びて行った文明を担っていた人々も、同じような

⁵³⁷現在よく耳にする「自然保護」という言葉にも、人間中心主義に立つヨーロッパ人の「自然支配型」発想が感じられると、岸根は鋭く指摘している。岸根、前掲書、pp.127-8、及び pp.139-40。

⁵³⁸西田正規「農耕は人間の知恵の所産か？」梅原猛・安田喜憲編『講座文明と環境 3 農耕と文明』朝倉書店1995、p.222。

考え方をしていたのであろう。ほんの小さな穴があいただけで、ダムが壊れる元になることを知識としては知っていたながら、それを自分たちに本当に関わりのあることとして考えることができないのが人間である。人は、えてして歴史から学ばない。その証拠に、人間の歴史を見ると、同じような過ちを繰り返し繰り返し行っているのがわかる。

しかし、このようなことはいいかげんにやめなければならない。人間が本当に万物の霊長であるならば、今ほど人間にしかない知恵を示すべき時はない。もしこのまま成長指向を続けて行けば、そしてそれが先進国だけでなく地球上の全ての国に及べば—現在、そうなりつつあるが⁵³⁹—、遠からず地球は破滅する。そうならないためにはどうすればいいのか。少なくとも、今のままでは駄目なことは明らかである。今の生活の快適さを、いつかは犠牲にしなければならない時が来るであろう。人類全体が共存するためには、物があふれる便利な生活を享受している我々豊かな国の人々が犠牲を強いられることは仕方がない。

もう、開発一辺倒の考えを、保存すること、守ることに変えるべき時が来ているように思われる。自然環境を破壊することで、物を作り、便利さ・快適さばかりを追及するあり方・生き方を見直さなければならない。さもなければ、第3章で述べた人々の悲劇を我々は繰り返すことになる。かつて滅びた文明は、局地的存在に過ぎなかった。しかしながら、地球全体が環境破壊の危機にさらされている今、我々現代人には逃げるべき場所はないのである。

我々は、現代文明は永遠に続くという錯覚・幻想を抱いているのではなからうか。これまで

⁵³⁹岸根は、東洋文明と西洋文明を「自然親和型自然共生型」と「自然対決型自然支配型」と対比させた上で、「森の東洋文明によるかぎり、環境問題は起こらない」「西洋の草原の文明によるかぎり、環境問題は起こるべくして起こる」と言い切っている。岸根卓郎、前掲書、pp.10-12。しかしながら、いちはやく西洋化を成し遂げた日本のみならず、韓国や中国及び東南アジアの国々までが「森の東洋文明」を忘れ、現在の環境破壊を生み出す元になった「西洋文明」化に向かって邁進しているのが現状である。

の人間の歴史の中で、数多くの文明が栄え、滅びていった。文明は滅ぶ。これは、人間は死ぬ、というのと同じ位確かなことなのである。一旦生まれて死なない人間がいないように、文明もいつか必ず衰退する。現代文明が滅びるとするのは、極めて当り前のことなのである。問題は、それが直前に迫っている可能性が高いということなのである。人々が今の考えを変え、生き方を変えなければ、間違いなく人類社会は21世紀には滅亡するであろう。ノストラダムスが予言したように、1999年に人類が滅亡するかどうかは分からないが、これを100年繰り下げるのであれば、むしろ当然の帰結としてそうなるであろう。

寺田寅彦は、『天災と国防』の中で、「文明が進めば進む程天然の暴威による災害がその激烈の度を増す」と述べている⁴⁰。つまり、発展した文明ほど自然の力の前にはもろく、脆弱さを露呈するのである。今ほど、人間が自然の前に謙虚になることを求められている時代はないであろう。そして、それができないときには、人類は滅びるしかないのである。

参考文献

環境破壊に関する文献は膨大である。ここでは、註に記したものを以外で本論考を作成する際に参考にした文献のみを挙げる。

- 1) 石弘之・沼田真編『講座文明と環境 11 環境危機と現代文明』朝倉書店1996
- 2) 伊東俊太郎編『講座文明と環境 14 環境倫理と環境教育』朝倉書店1996
- 3) 伊東俊太郎・安田喜憲編『文明と環境』日本学術振興会1995
- 4) 伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境 2 地球と文明の画期』朝倉書店1996
- 5) 梅原猛『森の思想が人類を救う』小学館1995
- 6) 梅原猛・安田喜憲編『講座文明と環境 3 農耕と文明』朝倉書店1995
- 7) 大石真人『森林破壊と地球環境』丸善1995
- 8) 河野果「人口爆発」石弘之・沼田真編『講座文明と環境 11 環境危機と現代文明』朝倉書店1996, p.75-87.
- 9) 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす一環境倫理とネットワーク』筑摩書房1996
- 10) 鈴木秀夫『気候の変化が言葉をかえた一言語年代学によるアプローチ』日本放送出版協会1990
- 11) 竹村恵二「水河時代の画期」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境 2 地球と文明の画期』朝倉書店1996, pp.44-56.
- 12) 常木晃「シリア文明の興亡と環境変動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994, pp.85-109.
- 13) 中井義明「ミケーネ文明の衰亡と環境変動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994, pp.195-215.
- 14) 沼田真『自然保護という思想』岩波書店1994
- 15) 速水融「人口変動に刻まれた歴史」伊東俊太郎・安田喜憲編『文明と環境』日本学術振興会1995, pp.51-64.
- 16) 平野秀樹『森林理想郷を求めて—美しく小さなまちへ—』中央公論社1996
- 17) 町田洋・森脇広編『文明と環境 III 火山噴火と環境・文明』思文閣出版1994
- 18) 松本健「メソポタミア文明の興亡と環境変動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994, pp.65-84.
- 19) 屋形禎亮「エジプト文明の興亡と気候変動」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994, pp.110-25.
- 20) 安田喜憲「紀元前1000年のクライシス」安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994, pp.177-94.
- 21) 安田喜憲『森と文明の物語』筑摩書房1995
- 22) 安田喜憲「地球と文明の画期」伊東俊太郎・安田喜憲編『講座文明と環境 2 地球と文明の画期』朝倉書店1996, pp.11-27.
- 23) 安田喜憲・川西宏幸編『文明と環境 I 古代文明と環境』思文閣出版1994
- 24) 安田喜憲・林俊雄編『講座文明と環境 5 文明の危機—民族移動の世紀』朝倉書店1996
- 25) 安田喜憲・松岡数充編『文明と環境 II 日本文化と民族移動』思文閣出版1994
- 26) 安成哲三「アジア・モンスーンの思想—地球環境問題の解明に向けて」吉野正敏・安田喜憲編『講座文明と環境 6 歴史と気候』朝倉書店1995, pp.261-66.

⁴⁰根本順吉『超異常気象—30年の記録から—』中央公論社1994, p.105.

- 27) 山折哲雄・中西進編『講座文明と環境 13 宗教と文明』朝倉書店1996
- 28) 吉野正敏・安田喜憲編『講座文明と環境 6 歴史と気候』朝倉書店1995